
けいおん！ 音の軌跡

クロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 音の軌跡

【Nコード】

N8815Z

【作者名】

クロウ

【あらすじ】

俺たちが歩んだ道はかけがえのないもの。それは、他人から見ればちっぽけなものかもしれないけれど、俺たちにとっては素晴らしいものだったんだ。この物語には、そんな俺たちの軌跡が詰まっている。「ナツ君、何やってるの?」「(唯)「ナツ、どうしたんだ?」「(漣)「ナツ、カツコつけんな」「(律)「ナツくん、かつこいいよ」「(紬)「ナツ先輩、似合いません」「(梓)「夏陽……………」笑)「(優斗)「おいコラ優斗〜!……………」とまあ、こんな感じだけどよろしくな?」「ぷぷっ……………夏陽……………」ゆ〜う〜とお〜〜!!」「(

夏陽)

一話 出遣い(前書き)

拙い文章ですが、よろしくお願ひします。
それでは、どつどつ。

一話 出遣い

風に舞う花びらが頬を翳める。

今日は私立桜が丘高校の合格発表の日だ。

受かってると嬉しいな〜、と軽いノリで俺こと風宮夏陽は掲示板を見る。

「やあ、夏陽」

「ん？ああ、お前もここ受けたんだっけ」

俺に話しかけてきたのは、中学のころから一緒の高梨優斗だった。

「どうだった？」

掲示板を指さし、優斗は言う。

この様子じゃ、こいつは合格してたんだな。

「まだ見てない……お、発見。ま、当然といえば当然だな」

あの努力が無駄になるなんてことにならなかっただけ良かった。

「あははっ。二人で二日間寝ないで勉強したもんね。アレは辛かったなあ」

「笑い事じゃないけどな」

中学の頃の思い出に浸りながら、俺たちは歩きだした。

とはいえ、まだ卒業してないけどな。

『憂、合格してたよ〜!』

『やったね、お姉ちゃん!』

『律、やったぞ!』

『漣、あつたぞ、私の番号!』

『もしもし、お父さん?……うん、合格してたよ』

ふと、そんな声が俺の耳に聞こえた。

それが、俺を変えていく声だということは、この時はまだ知る由もなかった。

優斗と別れ一人で歩いていると、後ろから声をかけられた。

「受験票、落としたよ〜」

振り返ると、茶髪のショートボブの女子がそこにいた。

「ん、ありがとう」

「ねえ、君、受かった?」

見ず知らずの人間に聞いていいものなのか、と俺は思った。

「ああ、受かってたよ」

とりあえず質問に答える。

受かってて良かった……

「そっか、私と同じだね！」

そっか、この子も桜高に合格したのか。

「あ、名前なんて言うの？」

「ああ、自己紹介まだだったっけ。俺は、風宮夏陽。

好きなものはファミレスのセットメニュー、得意なものはギター。

まあ、同じクラスになったらよろしくな。んで、君は？」

「私は唯。平沢唯だよ。よろしくね、ナツくん」

「……はい？な、ナツくん？」

初対面の女子に一発で渾名をつけられた。

……しかも、ナツくん？

「うん。『夏陽』だからナツくん」

「あのさあ……さすがにそれは……」

抗議しようとした時、

「お姉ちゃん！」

ポニーテールの女子が、走ってきた。
言動から察するに、平沢の妹だろう。

「受験票、渡した？」

「うん」

「あ、申し遅れました、お姉ちゃんの妹の平沢憂です。よろしくお
願います」

なんか、しっかりした子だなあ……

「俺は「こつちはね、ナツくんだよ！さっき、友達になったんだあ
」……………」

「な、ナツくん？」

「風宮夏陽。だからナツくんなんだと」

「へ、へえ……………」

ま、呼び方はどうでもいつか。
正直、嫌じゃないし。

「夏陽さん、これから食事でもどうですか？合格祝いも兼ねて」

「おお〜！それいいね〜！」

「別に構わないけどなあ……………良いのか？」「一緒しちゃって」

なんかこう、一緒に食事つても気まずい気がするんだよね。
平沢は気にしないとは思っけど。

「ぜんっぜん構わないよ！ね、憂！」

「はい。夏陽さんさえよければ」

「そっか。じゃ、行こうか！」

「レッシン」

こうして、三人で平沢の家へ。

……………そう、……………平沢の家へ。

「なあ、どっかで食っの？」

この辺は俺の家からも近いので、地理についてはよく知っている。
だから、どこで食事をとるのか気になった。
ファミレスやバイキングは逆方面だったはず。

「もちろん、私っちだよ」 憂のご飯はね、すっごく美味しいんだ
「よ」

..... 私たち？

何言ってるだろう。

平沢の家？女子の家？知り合ってる数十分の？

「あ、あのさ.....さすがに女子の家に入るのは.....」

「別に気にしなくても大丈夫ですよ？

夏陽さん悪い人じゃなさそうですし、

友達の家気分でも全然平気ですよ」

「ナツくんなら大丈夫だよ！だってナツくんだもん！」

平沢、お前の理由づけはおかしいと思うぞ。

「そこまで言うなら.....まあ、いいか」

多少の抵抗を感じながら歩く。

「ここだよ〜」

ふと気づけば、そこには俺の家と同じくらいの家。
どうやら平沢の家に着いたらしい。

「どっぞどっぞ〜」

「お、お邪魔します.....」

「あ、スリッパどうぞ」

(ホントによくできた子だなあ……)

平沢はこんな妹を持って幸せだなあ……

俺も兄弟欲しいなあ……ああ、妹がいいなあ……

「できるまでちょっと待っていてくださいね。お風呂でも入りますか？」

「いや、大丈夫だよ。それより、手伝おうか？」

「いえ、お招きしておいて手伝わせるのも……」

「ナツくん!!」

「うわっ!?!ひ、平沢!?!お、おい、離れろっ!?!」

平沢妹と話していたら平沢に抱きつかれた。
俺も健全な男子なので、恥ずかしいわけだ。

「やだ」

変な所でこの子は頑固だな……

「ねえ、ナツくん、上行こ?」

「上って……?」

「私の部屋だよ?」

この子には、性別という壁がないのか不思議に思った。

先ほど頑固なのを確認済みのため、素直に従う。

「どっぞ〜」

「し、失礼します……」

案外普通の部屋だった。

本棚に詰まった漫画、机に散らばるテキスト。
ベッドの上には脱ぎっぱなしのTシャツ。
ちよつとだらしない、かな。

「ちゃんと片付けた方がいいんじゃないか？」

「うっ……今度やっておきます……」

俺の指摘に顔を顰める平沢。

そんな仕種をする彼女に、少し心が揺れた。

俺たちは、中学生の頃の事、高校生になってからの事、お互いについて、面白おかしく話した。

やがて、そろそろ平沢妹が呼びに来るか、という所で、

「ねえ、ナツくんの初恋の人って誰？」

なんてことを聞いてきた。
こんな極限状態で恋の話を持ち出すなって…

「お、俺？そっいえば、好き、とか考えたことないな……ひ、平沢は、どうなんだ？」

律儀に答えて同じ質問をする。
すると、平沢は顔を赤くして答えた。

「へっ！？わ、私！？うーんと、私もあんまり考えたことなかったな〜」

じゃあ何で顔が赤いの、と聞こうとしたがやめた。
流石に今日初めて見知った女子にそこまで聞くつもりはない。
と、そこに、

「お姉ちゃん、夏陽さん、ご飯できましたよ〜」

料理が出来たという報告が。

「ホントに？ナツくん、行くー！」

「あ、ああ……ありがとな、平沢妹」

「いえいえ」

こうして、一緒に食事をとった。
はっきりに言って、めっちゃくちゃ美味しかった。

「今日は本当に世話になった。ありがとう」

じゃあね、と手を振って平沢家を後にする。

「バイバイ、ナツくん！」

平沢妹の料理の味も忘れられなさそうだが、この時の平沢の笑顔も忘れられそうにない。

「女子を意識するのって初めてかも……」

平沢が同じことを考えているなんて夢にも思わず、一人呟いた。

一話 出遭い(後書き)

進展早い? いえいえ、そんなことはありません。
ここからが遅いから。早熟ってやつです(笑)

二話 青春の始まり（前書き）

PSPがぶっこわれました。

いろいろありまして。はがな買い前前に本体かな……

真紅さん、感想ありがとうございます。

それでは、第二話、どうぞ。

二話 青春の始まり

「ふああ……………ねむ……………」

春休みが終わり、今日からいよいよ登校。

ちょっと面倒くさいけどまあ、仕方ないか。

買い置きのパンをバッグに詰めて食パンにイチゴジャムを塗る。

『今日の星座占い、一位はいて座のあなた！

ラッキーアイテムはピン留め！二位は……………』

お、一位か。ピンつけて運勢アップと行きますか。

テレビを消して洗面所へ向かう。

が、ピンを部屋に置きっぱにしてあったので、いたしかたなく自室へ。

「　　」

口笛を適当に吹きながらピンを手取る。

スタンドにかけてあるレキヤスターに目を向けて、また離す。

ふと、時計が目に入った。

そこには、俺を焦らせるのに十分すぎるほどの情報が刻まれていた。

.....
.....
「遅刻だあああああああつ!!!!!!!!」

髪も整えず、制服も着崩し、俺は家を飛び出した。

(ヤバい。初日から遅刻なんてそんなの拙いだろ……!!!)

ダッシュもダッシュ、全力ダッシュで道を急ぐ。
カーブを曲がると、誰かとぶつかりそうになった。

「ッッ!!す、すいません、大丈夫ですか!？」

過失はこちらにも十分といえるほどだったので、謝る。
やば、時間……!!
そこにいた人物を見て、ドキッとした。

「は、はい……って、ナツくん?」

「ん?ひ、平沢?ご、ごめんな。っと、急がないと拙いな……行く」

「ナツくん!」好きにしてくれ……………」

なんで二回も重ねて言う必要があったんだろう。と言うより、俺の自己紹介の重要な部分が平沢に取られてる気がする。

「フフツ。面白いわね。私は真鍋和。

唯とは幼なじみね。よろしく、夏陽」

真鍋和、ね。

「あ、そうだ。ナツくん、アドレス交換しようよ。

春休みの間寂しかったんだよ?和ちゃんも一緒に、ね」

「別に構わないけど……………ほら。完了つと。……………つてか、クラス分け見に行こうぜ」

手短に済ませてクラス分けを見るよう促すと、そこに、

「夏陽。おはよう……………つて、夏陽が女の子を連れてる?」

優斗登場。

盛大に勘違いしてるし。

「別にそんなんじゃないわねって……………ほら、自己紹介ぐらいしろって」

「はじめまして。夏陽の友達の高梨優斗です。よろしく。え〜と……………」

「平沢唯です。よろしくね、優斗君」

「真鍋和です。よろしく」

「平沢さんに、真鍋さん、ね。よろしく」

挨拶をすませ、今度こそクラス分けを見に。

「優斗、どうだった？」

「3組。夏陽は？」

「俺も。一年間よろしくな、優斗」

またしても同じクラスか。
ホント、縁が絶えないなあ。
そこに、平沢達が来た。

「ナツくんたち、何組だった？」

「俺たちは二人で3組だよ」

「ホントに！？私たちも3組なんだあゝ よろしくね、ナツくん！」

と言いながら抱きついてくる平沢を、俺は軽く避ける。
嬉しいのは分かるが、抱きつくのは、なあ……………

「私の家に来た時は避けなかったのに……………」

あゝあ。とんでもないことを言ってくれちゃったなあ、平沢。
真鍋はともかく、優斗はそれを知らないのに。

「へゝえ、夏陽、女子の家でそんなことしたんだ？」

ほら、こつこつ反応する。

めんどくさいなあ……………

「飯を一緒に、って誘われたただだよ……………文句ないよな……………」

「はいはい」

誤魔化しても無駄なので、正直に答えた。

とりあえず、同じクラスということで、一年間お世話になる教室へと四人で歩を進めた。

二話 青春の始まり（後書き）

正月中は更新辛いかもしれません。
受験勉強とかもあるけど時間見つけてやっていききたいと思います。
今後ともよろしくお願いします。

オリキャラ プロフィール(前書き)

オリキャラ二名の簡単なプロフィールです。

オリキャラ プロフィール

プロフィール

風宮 夏陽 かざみや なつひ

身長 171 cm

体重 55 kg

好きなもの

ファミレスのセットメニュー)

ドリンクバーもあれば更に良し。)

嫌いなもの

暑いのと寒いのが、静電気

見た感じも中身も普通の高校生。

髪は、黒髪をちょっとはねさせた感じ。

成績も悪くなく、別段抜き出ているわけでもない。

現在一人暮らしなので、家事も憂の邪魔にならない

くらいできる。

の世界へ。

小学校の時父親に貰ったギターをきっかけに、音楽

高梨 優斗 たかなし ゆうと

身長 173 cm

体重 54 kg

好きなもの

本(ジャンルは問わず、字が多

ければ良し)

嫌いなもの リア充（他人がイチャついでる
のを見ると腹立つ）

黒髪を下ろした、夏陽の友達。

成績優秀なのに予習・復習はそっちのけで夏陽に付
き合っていたため、

受験直前に辛い思いをしたが、本人は辛い、と本気
では感じていない。

意外と女子に興味津々。

オリキャラ プロフィール(後書き)

次話をお楽しみに！

三話 よく似た二人（前書き）

今回は夏陽と唯の距離が一気に近くなります。

でもまた離れてそのままちよっと経って……って感じで書いていきます。

それでは、どうぞ。

三話 よく似た二人

「新入生の皆さん……………」

校長先生の式辞が子守歌のように聞こえる。

今、俺は入学式のため講堂に来ている。

「今年から共学になった……………」

一言一言が俺を夢の世界へ連れて行くこととする。
そっいえば、今年から共学だったっけ…………。

「…………zzz…………うん…………もう食べられないよ……………」

俺の寝言じゃない。

もう誰か寝ちゃったのか。

声は、俺のすぐ隣……………平沢の席からのものだった。

平沢じゃあ……………仕方ないか。

「ふああ…………ダメだ…………俺も…………限界……………」

思考も停止し、瞼も閉じられていく。

俺には、抵抗という術はなかった。

『新人生起立』

その一言で目を覚ました。

ああ……寝ちやったのか。

号令に従い、立とうとすると、何かが左袖を引っ張った。

「うん……？なんだ……？つて、平沢？」

平沢が俺の袖を引っ張っていた。

「ナツくん……ダメ……だよ……」

何が！？何がダメなんだ、平沢！？

俺、お前の夢で何やってんの！？

……失礼、取り乱したな。

変な想像はやめて、平沢を起こす。

「……おい、平沢、起きろ」

すると、平沢は、ぱつと跳び起きた。

「あれ……？夢……？……ナツくん？」

「入学式、終わったぞ」

「もう終わっちゃったのか……早いなあ……」

まあ、その意見に関しては同感だな。

「ほら、行こう」

「待ってよ、ナツくん」

クラスメイトと共に講堂を後にする。

………なんか、嫌な予感………

俺は歩きながらそんなことを考えていた。

「風宮君、平沢さん」

嫌な予感的中。

担任の先生にいきなり名指しで呼ばれた。

……しかも平沢と一緒に。

「……………はい」

「はい！なんででしょう!？」

なんでこの状況でそんなハイテンションなの、
と聞いたかったけど、今はそんな気分じゃない。

「式的最中に寝てはいけませんよ？」

「まったく、夏陽は……………」

「唯も変わんないわね……………あの二人、似てるわね」

優斗と和が喋っているのが後ろから聞こえる。

「すみませんでした」

俺は深々と頭を下げる。

優斗め……………絶対笑ってるな……………？

「は、はいっ！すみませんっ!」

隣の席では平沢も頭を下げて……………

ゴソツ!!!

机に頭をぶつけていた。

「だ、大丈夫ですか？平沢さん」

「だ、大丈夫ですっ！」

ホントに大丈夫かな……？
たしか生徒手帳の中に……

「ほら、平沢」

「へ？ナツくん？これ…絆創膏？」

「ああ。傷に貼つといた方がいいんじゃないか？」

すると、平沢は眩しすぎるほどの笑顔で、言った。

「ありがと、ナツくん」

たったこれだけ。

たった八文字に、平沢の気持ちが籠っていたんだと思う。
人に感謝されるのも、悪くない、かな。

「夏陽、顔真っ赤だよ？」

「はあ！？な、何言ってるんだよ、優斗!!!」

やば、気が付かなかった。
考えれば考えるほど顔はさらに熱くなる。

『見せてくれるねえ』

『風宮君、ファイトだよ』

他のクラスメイトも参加してきて、もうお手上げ。
俺は一言残して廊下に出る。

「俺はそんなつもりないし、平沢だって迷惑そうだぞ！」

なんかなあ、と水道で顔を洗いながら考える。

(いったい何なんだかなあ……ま、ぐだぐだ考えても仕方ないか)

俺は、初めて平沢と会った日の帰りに呟いたことを思い出せなかった。

唯 side

何だろう。

私、どうしたんだろう。

さつき、絆創膏もらった時、嬉しい、って思った。

これって、恋、なのかな？

でも、ナツくんそんなつもりはないって言ってたし……

誰か好きな人がいるのかなあ……

「唯、大丈夫？」

そんな私を、和ちゃんが心配してくれた。

「うん、大丈夫だよ」

優斗君も、私を励ましてくれた。

私の心を見透かしたような目で。

「大丈夫。夏陽は嘘が下手だなあ」

そう言った。

でも、難しいことは分かんないや。

とりあえず、恋とかそういうのは後回しだね。

もん。.....だつて、なんかよく分かんないんだ

唯
side
了

三話 よく似た二人（後書き）

唯の言葉通り、恋は一時休戦です。
次回から軽音部がようやく登場！
お楽しみに！

四話 入部！（前書き）

軽音部登場！
入部編です。

四話 入部！

「夏陽、部活どうするの？」

始業式から一週間ちょっと経ち、夏陽に訊かれた。
部活、ねえ……………

「軽音部入れば？ちよつどギター募集してるし」

「うーん……………まあ、気が向いたら」

部活でバンド組むのも悪くないかも。

隣では平沢と真鍋も部活について話していた。

「和ちゃんは何部はいるの？」

「私は生徒会に入るつもりだけど……………唯は？」

「私？うーん、どうしよっかな」

真鍋は生徒会か。優斗と同じだな。

平沢は俺と同じくまだ定まってない様子だった。

「はあ……………こつやってニートができあがってくのね……………」

ココで真鍋の口から爆弾発言。

そんなわけないんだけど。

「ええっ！？そ、そうなの、ナツくん！？」

「大丈夫だな。でも、入らないってのもあれだから何か入った方がいいんじゃないか？」

「そ、そっか。じゃあ、じっくり考えてみるよ」

こうして、今日は部活の事は保留になった。

「ナツくん！私、軽音部にしたよ！」

ふうん。平沢は楽器できたのかあ。

「平沢、パート何やるの？」

「へ？ぱーと？」

……初心者だ。

軽音楽を全く知らない。

それどころか、音楽もあんまりかじってないな。

「……………平沢、軽音部って何だと思った？」

「……………く、口笛？」

いくら字が軽いって言ってもそれはないんじゃないかな。

「軽音楽っていうのはなあ……………」

俺の講義を聞き終えた平沢は、魂が抜けていた。

「どうしよう……………入部届出しちゃった……………」

なんでもう出しているのか聞きたいぐらい俺は驚いた。

「仕方ない……………入部を取り消すようお願いしに行ってくるしかないな」

「ええっ！？な、ナツくん、一緒に……………」

「すまないな、平沢。俺はちょっと放課後用事があるんだ。

悪いけど一人で行ってきてくれるか？まあ、あとで合流するかも知れないけど」

懇願する平沢をよそに、俺は一人苦笑した。

「どう思う、優斗？」

俺は優斗に訊ねる。

「夏陽がいいと思えば、それでいいんじゃないかな？」

中学の頃の文化祭、面白くなかったんでしょ？

高校は違うよ。バンド組んで、みんなで演奏して……

僕は、夏陽の望む世界が、ここにあると思う」

………なんかかつこいいこと言った。

ちよつと腹立つ。

「そっか……俺の夢が、ここに……」

………ありがと、優斗。決心ついた。

俺、行ってくるよ。お前も頑張れよ？」

「言われなくても」

ここから、始まるんだな。

俺の、長年の夢が

「ここか……………」

今、俺は、軽音部の部室と思われる部屋の前にいる。

(行くならさっさと行くとしますか。)

そういえば、平沢はどうしたんだろ……………?)

そんなことを考えながら、ドアを開ける。

「失礼します……………軽音部ですか……………?」

挨拶をすると、カチューシャの女子が答えた。

「そうだけど……………もしかして、入部!??」

「そうですね……………」
「おい、みんな〜!もう一人入部希望者が来たぞ〜!」
「…もう一人?」

まさか……………

「ああ〜！ナツくん！」

「平沢？結局、入部したんだな」

平沢が、どういう経緯か知らないけど入部してた。

一生懸命になれば、それでいいと思う。

軽音楽が、平沢が打ち込めるものなら……

「自己紹介まだだったっけ。私は田井中律。

パートはドラム。そしてこの部の部長だ！

ちなみに、全員一年だから敬語じゃなくていいぞ」

カチューシャが田井中。

「私は、琴吹絃です。パートはキーボード。

あ、飲み物は何がいいかな？」

「ん〜、じゃあ、紅茶で」

お茶を出してくれるんだ。

うわ……高そ……

とりあえず、おっとりさんが琴吹。

「俺は、「ナツくん！」………風宮、夏陽……

呼び方は、苗字じゃなければ………よろしくな、琴吹、田井中」

三回目だ……俺の自己紹介って平沢の所有物なのかな……

「なあ、ナツ」

「ん？なに？」

田井中にコールされる。

「私らだって名前と呼んでるんだから、お前も苗字禁止だ！」

「そつだそつだ〜！」

「そつだよナツくん！りつちゃんの言う通りだよ！」

田井中……もとい、律の意見につむ……ムギと唯が便乗する。
別に構わないんだけどな。

「はいはい、了解いたしました、律殿、ムギ殿、唯殿」

そこで、ムギが何かに気づいた。

「あれ？澪ちゃんは？」

澪ちゃん？もう一人部員がいたのか。

その澪ちゃんとやらを律が呼ぶ。

「み〜お〜！！出てこ〜い！！」

ビクッ、と机の陰に隠れていた女子が顔をのぞかせる。

「挨拶ぐらいしろつて。新入部員だぞ？」

恐る恐る、といった感じで、その子は口を開いた。

「あ、秋山、み、漣、です。パートは、ベース、です。よろしく、か、風宮君」

異常な恥ずかしがり屋、だなあ。
俺ってそんなに怖いかなあ……？

「気にすんなよ、ナツ、漣は男子が苦手なんだ」

あゝあ、納得。

「あと、漣？俺も名前で呼ぶから、苗字禁止。

それから、君付も。他人行儀で嫌なんだ。

同じ部活の仲間なんだから、それくらいは、な？」

俺的には優しいつもりで話しかける。
すると、それに応えるように、

「な、ナツ……？よ、よろしく、な」

まだ慣れないみたいだけど、俺の事を受け入れてくれたみたいだ。
さてと、と振り返ると、平沢が頬を膨らませていた。

何かあったのか、と聞こうとしたけど、律に遮られた。

「ナツは、楽器何ができるんだ？」

「俺？俺は、ギター、だなあ。長いことやってたから、多少の事は出来るよ」

「へー。じゃあ、ナツはギター、と……唯は、どうするっ？」

平沢が何をやりたいかにもよるが、ギターでいいと思う。
俺が教えてやれるし、演奏の幅も広がる。
当の平沢は、

「うーん……何がいいかな……？」

決められないようだった。

そこに、俺は助け船を出してあげる。

「ギターでいいんじゃないか？それなら俺が教えてやれるし」

「え……？ほんと！？教えてくれる！？絶対！？」

何を必死になつてゐるんだろう。

これで教えないとか、鬼か。

「ああ、構わないよ」

「じゃあ、私ギターやりますっ！」

「じゃあ、決まりだな。唯もギター、ね」

どうにか入部。

この五人で軽音部をやることになった。

「ところで、ギターっていくらぐらいするの？」

ある日の部活、平沢が唐突に訪ねてきた。

ちなみに俺、ギターを三日間忘れ中で、遷に怒られたばかり。

「そう……だな。最悪五万。そのくらいは必要かも。」

あんまり安いのが使えないからなあ。……どうしたんだ？」

平沢の目が明後日に向けていた。

「りっちゃん……部費で落ちませんか？」

「落ちません」

当たり前だよな。

まあ、お小遣いの前借りしかないな。

「一応、楽器店に明日あたり行くか？」

「そうだな、下見も兼ねて行く。これも部活の一環って事で」

「そうね、私もその方がいいと思うわ」

そういうわけで、明日は平沢のために楽器店へ。
次の部活は忘れずにテレキャス持って来ないとな……

四話 入部！（後書き）

次回、ギター購入です。
感想をお待ちしています。

五話 遅刻王 夏陽（前書き）

お待たせいたしました。
五話、どうぞ。

五話 遅刻王 夏陽

両手に花、って言葉じゃ足りないほどの凄い状況に俺はいた。

「……いらつしゃいませ、ご主人様!!」

「……あれ」。

何やってんの……？

家に着き、玄関を開けると、

漣、律、ムギ、そして別れて逆方向へ言った唯が、
派手も派手、超ド派手に俺を出迎えた。

「え？た、ただいま……？」

他の三人はともかく、漣が恥じらいもなく、俺を出迎えるのには驚いた。

しかも、全員メイド服。

何処から調達したのか、気になるな……

「……先にお風呂にいたしますか？」

お食事にいたしますか？

それとも、……わ、た、し……？」「」

ポツ、と顔が熱くなる。

い、いったい何を言ってるんだろっ……？

「な、何やってんの、みんな……？」

四人に問うけど、笑顔のまま答えようとしないと、突然誰かのケータイが鳴った。

「で、電話……出た方がいいんじゃないか……？」

それでも、誰一人動こうとしない。

「な、何なんだ……？ いったいどうしちゃったんだよおおおっ！
！」

耐えきれず俺は叫んだ。

視界がどんどん狭くなる。

その中で、最後までケータイの着信音は鳴り響いていた。

ピリリ、ピリリ、というケータイの音で目覚める。
ゆ、め………にしてはリアルだったな……

「うん……？ 溼……？ どうしたんだ……？」

ケータイを手にとり、通話ボタンを押す。

「もしもし……?」

眠気を堪えて会話に応じる。

「も、もしもし、ナツ?今どこにいるんだ?」

「どっつて……家、だけど……って言うか今まで寝てたし……」

「約束、忘れたのか?」

若干キレ気味の濁。

約束……?」

「何かあつ……」

たっけ、と言おうとして口を噤む。

あれ……?」

今日はたしか……」

「唯のギター見るんだろ」

焦って跳ね起き、時計を見る。

.....

「うわあああああああつ!」

「ぐめんなあああああああああああい!……!」

謝りながら支度をすませ、待ち合わせ場所へ疾駆した。

時刻は、待ち合わせ時間を十五分も回っていた。

「遅いよ、ナツくん！」

「お前が言っな！」

部長、ナイスツッコミ。

唯、お前も俺と同じだろう。

ただ俺より早かったただけだろうに。

「まったく……遅いぞ、二人とも」

「すみません……」

「い、い、ごめんなさい」

本気で忘れていた。

悪いとは思っけど、当事者が忘れちゃあダメだろ、唯。

「唯、お金の方は……?」

「大丈夫。お母さんに無理言っつて前借りしてきたから」

「そっか。それは良かった」

無事に借りられて何よりだ。

「じゃ、行くござい」

「そっだな」

「行きましょう」

律に漣、ムギが続く。

あれ……?唯は……?

「今なら……買える……!」

欲に負けてるし。

ギター買っつんじゃないのか……?

「油売ってるんじゃない」

「あぁっ!ナツくんのケチっ!」

悪いのは俺じゃなくないかな!?

ぶうぶう言いながら袖を引っ張る唯。
そんな俺たちを見て、漣、律、ムギは苦笑。
そして、俺たちは歩き出す。

あれ……………？

あの三人……………今どこに入った……………？

俺と漣は、

洋服店の前に立ち尽くした。

「いっぱい買ったな？」

「私も」

「買いすぎだろ！」

漣、それは正しいツッコミじゃないよ。
本物は、

「お前ら、何しに来たんだよ!？」

これだ。

ギター買いに来て服買ってデザート食ってって何だよ。

「あぁっ! そうだ、ギター買いに来たんだっ！」

「忘れてたのか!？」

俺と漣の声が重なる。

そんな中ムギは一人、

「いいわね、こういうのも？」

夢の世界へ旅立っていた。

部活の時もムギは偶にこうなる。

……なんでだろう。

「とにかく、行くぞ」

「待つてよ、ナツくん」

俺は、散々待った。

喫茶店を後にし、俺たちは楽器店『10GIA』へ。

「わあ〜!! 凄い!!」

店に入るなり、唯が叫んだ。

「唯……頼むからはしゃがないでくれ……」

ものすごく恥ずかしい。

唯の方に視線を向けると、ツインネックのギターを見て？マークを浮かべていた。

「ちょっと見ててくれる？すぐ戻るからさ」

唯を三人に任せ、俺はギター用品を見に。

「……これとこれ……あと、これくらいかな」

一式そろえて会計を済ませる。

やっぱり高いなあ……

と言っても俺のじゃないけど。

まあ、誰のかは秘密って事で。

「おつまたせ」

唯たちの元へ行くとムギに質問された。

「ねえ、ナツくん？値切りってなあに？」

いったいどうしてそんなことを聞くのかは大方予想がついた。

唯が欲しがっているギターが高いんだろう。

アイツ、頑固だからなあ……そう、頑固なんだよな……
かと言って友達に払わせるのはダメだと言い張るしな……
まあそんなことはさておき、ムギの質問に答える。

「値切りって言うのは、店の人と交渉して、
商品の値段を下げてもらうことだな。」

……まあ、成功するとは限らないけど」

「りっちゃんはやったことあるんだって。」

羨ましいわ、そういうの憧れなの」

憧れ……夢。

俺の夢……叶うのかな……？

たとえ無理でも……俺は、みんなを信じていくさ。

……きつと。

「?????どうしたの、ナツくん？顔が険しいよ？」

……ああ。

ちよっと自分の世界入り過ぎちゃったか。
って言うか値切るのが憧れって……

「なんでもない。大丈夫だよ。唯の所行ってくる」

去り際に「もうひとこえ」なんて聞こえたけど、まあ気にしない
でおこづ。

「どづした唯？……って……諦めた方がいいと思っけどな、これは
……」

唯が見ていたのは、二十五万のレスポール。
唯の所持金の五倍に等しい。

しかも、欲しい理由は、「可愛いから」「らしい。

……………まあ、そういう思い入れも大事だよな。

事実、俺もカツコイイからって理由で今のテレキャス選んだし。

「唯、流石にこれは無理だ。こっちのストラトキャスターとかは？
悪くはないと思うけどなあ。お前が決めることだしな」

俺が助言すると、澪も口を開く。

「ほら、唯、ナツもそう言ってるんだし……………」

こっちはどうだ？唯の手にも合うんじゃないか？」

「……………(フルフル)」

いろいろ言ってみるけどやっぱり駄目だ。

頑固すぎるだろ……………」

いくらなんでもお金足りなきゃ……………」

……………そうだ。

「「バイトしよう」「

……………あれ？部長？俺と同じこと考えたのか。

「唯がギター買わないと始まんないだろ？」

私たち、仲間じゃん！みんなで手伝おうぜ！」

「ええっ！？そ、そんなの悪いよ」

「…………別にそんなことないと思うけどな。」

だって、仲間じゃん。支えて、支えられて、つてものだぞ？」

「私もやりますっ！！バイトって、一度やってみたかったの！」

ムギって、若干ずれてる…………のかな？

「そうだな。軽音部の活動って事で。できることをやるっ」

「い、いいの、みんな…………」

「あつたりまえじゃん」

「あ、ありがとう、みんな！！私も、頑張るから！！」

こういうときの唯の顔、嫌いじゃないな。

優しさとか、そういうのに満ちてて、心強い。

……………普段からそうであってほしい。

「じゃ、今日は解散って事で。バイトについては明日から考えよう」

俺の声を区切りに、店から出る。

バイト、ねえ…………

帰り道。

唯と二人で歩いていると、唐突に話しかけられた。

「そういえば、ナツくんは何買ったの？」

ここでその質問……？

まさかこのタイミングで『お前のためにギター用品一式買ってました』
なんて言えるわけないだろう。

「秘密、だよ、女子禁制の………な？」

………言っておいて気持ち悪い。

茶目っ気って俺に向いてなかったのか……

「………ナツくんって、そういう趣味だったんだ………ショック………」

「思いつきり明後日の方向に勘違いしてるからな!？」

俺別に男好きじゃないから!!普通に女子が好きだから!!」

言ってから気付く。

多分次の質問は……

「誰が、好きなの………?」

ほらな。予想はついた。

「別に、誰がって訳じゃない。

俺は、基本的に皆が好きだから」

だから、焦ることもなく答える。

当然、ホントの気持ちなんて出てくるわけなかった。

「そんなの知ってるよ……」

その中でも誰が、って聞きたかったのに……」

そんな唯の眩きは俺には届かなかった。

「じゃあな。気をつけろよ。

……バイト、頑張ろうな」

「……うん……」

そう言って、俺たちは別れた。

五話 遅刻王 夏陽（後書き）

次回、本当にギター買います。
そして、夏陽が……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8815z/>

けいおん！ 音の軌跡

2011年12月31日01時47分発行